

◆ I C U P

丘の上にある小さな喫茶店“ユーカリ”。

ひとり、コーヒー豆を挽く縁。

恩ナレーション

「朝7時の風はまだ冷たい。

伸びすぎた枝は大型車両の通行を妨げるからと、数年前に切り揃えられた。それ以来、桜の咲き具合はあまり良くない。それについて駅前古い商店主たちは、結論の出ない議論をいまだに繰り返している。

虹ヶ丘駅は各駅停車しか停まらない。それでも、朝は登校してきた高校生と通勤のサラリーマンたちでごった返す。

高校生たちは改札を出て左側に進み、バスのロータリーをぐるりと囲むような歩道橋を半周して階段を下り、学校に向かう。10分ほどの道のりだけど、一部の生徒は森の真ん中を突っ切る近道に行く。

この季節、森に住むカラスたちは子育ての真っ最中だ。そのため気が荒くなっていて、たびたび生徒達の頭すれすれに攻撃をしかけ、悲鳴を上げてさせている。

それとは逆方向になだらかな坂を5分ほど登った丘の上に、私の働く喫茶ユーカリがある。築50年は下らない、昔はよく見た煉瓦ふうの外壁の4階建てマンションの一階だ。山荘のロτζジのような外装は少しばかり古臭いけれど、店主の縁は案外気に入っているらしい。もちろん私も」

朝7時、開店の時間。開店準備をする恩。

縁「よし、準備完了。恩ちゃん、オープンしていいわよ」

恩「OK。あれ？今日のコーヒー、いい香り」

縁「わかった？ブレンド、ちよつと変えてもらったんだ」

恩「へー。味見させてよ」

縁「いいわよ。はい、どうぞ」

恩「マンデリン？いや、グアテマラかな？」

縁「さすが！正解はグアテマラ。でも秘訣はコロンビアの深入りよ」

恩「なるほど。しかし縁は本当にコーヒーが好きよね」

縁「ふふふ。こんなに苦いのよね」

恩「苦みがある方がいいのは人生も同じ、なんてね」

縁「・・・あと3日か」

恩「・・・そうだね。でもいつかまたさ」

縁「いけない、時間だ。急がないとブラジルコーヒーより苦そうな人たちがすぐ来るわよ」

恩「よっしゃ、縁、看板出すよ」

縁「うん、お願い。喫茶ユーカリ、開店しまーす」

恩ナレーション

「女子高校の二年生の時に出会ってから十年以上が経った。卒業後、私は芸術大学へ進み、縁は大手珈琲チェーンに就職したが音信が途絶えることはなかった。

居抜きとはいえ、開店資金にはずいぶんかかった。貯金なんかじゃ到底足りず、縁は親や銀行から合せて300万円を借りた。

私の方は、最近は絵を描くことも無くなったが、5年前の縁の誕生日に贈ったユーカリの本の絵が、店の右側の壁にずっと飾られている。何度も外すように頼んだが、縁は決してウンと言わない。それはまるで、私がまだ絵を完全にあきらめていないことを、誰かに証明しようとしているようだった」

ドアチャイムの音。

ぐったりした様子で最初の客、漫画家の漆原ニーチャがやって来ていつもの席に座る。

お冷を運ぶ恩。

縁「いらっしやいませ」

恩「おはよう、ニーチェさん。また徹夜？」

ニーチェ「・・・ネームがまだ半分も終わってないのよ。どうしよ、締切明日なのに・・・。とりあえずいつもの」

恩「あらあら、漫画家さんも大変ね。オーダー、ワンモーニング」

縁「ワンモーニング、了解」

恩「だけど漫画って儲かるんでしょ？」

ニーチェ「売ればね」

恩「売れてるの？ニーチェさん」

ニーチェ「んっぐ・・・毎朝、同じ店でモーニングセット注文できる程度にはね」

恩「微妙ね」

モーニングセットを運んでくる縁。

縁「お待たせしました。モーニングセットです」

ニーチェ「ありがとう」

縁「だけど私はニーチェさんの漫画好きですよ」

ニーチェ「本当？縁さん！？」

縁「ええ。毎回じゃないけど、見つけたら買って読んでますよ、週刊・・・えーと、なんだっけ？あ！週刊バカチン！」

ニーチェ「アラジン！」

縁「あ、そうだ・・・週刊アラジンね・・・ごめんなさい」

恩「もう」

ニーチェ「まあ、たしかに、コンビニに必ず置いてあるわけじゃないし、2流の週刊マンガよね。今だ、単行本も出ないし。才能ないのかなぁ・・・」

恩「そんなことないわよ、ねえ？」

縁「そうですね、才能が無くてもたくさん努力すればきつと」

ニーチェ「やっぱり才能ないと思ってんでしょ!？」

縁「いいえ、いいえ、そうじゃなくて、まだ若いんだし」

ニーチェ「アラサー。アラウンドサーティ。アラウンドの前か後は聞かないで」

恩「聞きません」

ニーチェ「私の漫画、どうしたら面白くなるんだろう?なにかいいアイデアない?ねえ?縁さん」

縁「漫画のアイデアはちよつと・・・」

ニーチェ「自分では面白いと思って書くのよ。だけど、編集のやつが必ず駄目出ししてくるわけ。その度に思うのよね。読者は面白いと思うかもしれないのに、読者に届く前にこいつに邪魔されてるんじゃないか?って。全員が全員だなんて言わないけど、一人でも面白いと思ってくれる人がいるなら、編集者なんかより、その人に読んでもらいたいと思うじゃない?」

恩「編集者が先に読んじやうから、そこを通過しないと絶対にその一人には届かないってことか」

縁「でも、編集者がいないと本には載らないわけでしょ?」

恩「そうなると、同人誌ってことになるのかな?」

ニーチェ「ノーノーノー!それじゃあアマチュアってことになっちゃうじゃない」

恩「じゃあ、どうしたいんですか?」

ニーチェ「それが分かれば苦労しないっての」

縁「でも」

ニーチェ「でも何よ?」

縁「好きなマンガ書いてるじゃないですか。こんなちっぽけな店のモーニングしか食べられないかもしれないけど、ちゃんと自分の好きな事でご飯食べてるだもの。すごいですよ、ニーチェさん。尊敬します」

ニーチェ「え?・・・いや・・・だけど、この店のモーニングだって、日本一おいしいと思うけどね、私は。うん、尊敬しちゃう」

縁「ありがとうございます」

ニーチェ「おっと、コーヒーが覚めちゃう。あらら?コーヒー変えた?」

恩「おー、さすが常連さん」

ニーチェ「何年通つてると思ってるのよ」

恩「開店からだから7年くらい？」

ニーチェ「8年目」

恩「そっか・・・実はね、ニーチェさん」

縁「ほらほら恩ちゃん、お食事の邪魔はそれくらいにして仕事仕事」

恩「ああ、はい・・・」

縁「ニーチェさん、しっかり食べて、ネームの続き頑張ってくださいね」

ニーチェ「うん、ありがとう、縁さん。なんだか、書けそう」

縁「良かった」

恩「縁・・・」

ドアチャイムの音。

ホステスのエリカがやってくる。まだ少し酔っている。

恩「いらっしやいませ」

エリカ「おはよう」

縁「おはようございます、エリカさん。いらっしやいませ」

エリカ「おはよう、縁ママ。お元氣そうでなにより」

恩「今日も大分飲まれたようですね」

エリカ「仕方ないのよ。スナックなんて今どき、はやらないからさ」

恩「お客さん減ってるってこと？」

縁「恩ちゃん」

恩「いけない」

エリカ「いいのよ。昔からの常連さんはどんどん年取ってさ、死んじやったり、お医者さんにお酒止められたり。そのくせ今の若い人はお酒飲まないじゃない？だから、来たお客さんのお酒、こっちがガンガン飲まないと、売上がらないってわけ」

ニーチェ「んー、酒臭い」

エリカ「あら、漫画家先生いたの？おはよう。ごめんね、臭くって」

ニーチェ「別にいいけど、常連と一緒に年取っていくのは自分も一緒なんだから、少しは体のこと考えたら？」

エリカ「毎晩徹夜のアンタにだけは言われたくないわよ」

ニーチェ「そりゃそうね（笑）」

みんな「（笑）」

縁「モーニングでいいですか？」

エリカ「うん」

キッチンに行く縁。

ドアチャイムの音。

無言で入ってくる、浪人生の音川君。

恩「いらっしやい」

音川「・・・モーニングセットを」

恩「了解。オーダー、ワンモーニング」

縁「はい」

キッチンから返事をする縁。

早速、勉強を始める音川。

恩「勉強？」

音川「・・・はい」

恩「少しくらい休めばいいのに。この間終わったばかりじゃない」

音川「でも・・・勉強しないと」

恩「だけどさ、朝くらいゆっくりコーヒー飲んだって、罰当らないんじゃない？」

音川「朝のほうが、勉強は身に着くんだそうです。僕には時間が無いので」

エリカ「あれ？音川君、受験終わったんじゃないの？なんでまた勉強してんの？」

ニーチェ「馬鹿ね。落ちたのよ」

エリカ「落ちた？あんたまた落ちたの!？」

音川「うっ・・・」

音川の注文を運んでくる縁。

縁「エリカさん！ニーチェさんも。もう・・・はい、音川君、モーニングセット」

音川「ありがとうございます・・・ございます・・・」

恩「ほら、なんてたって東大だからさ、志望校が」

縁「大丈夫、きつと来年は受かるわよ。こうして朝から勉強してるんだし。ね？恩ちゃん」

恩「うん、わがユーカリのモーニングセットを食べて勉強すれば来年こそ絶対東大に」

音川「食べてきました」

恩「え？」

音川「1年間、食べてきましたが、東大には合格出来ませんでした」

縁「あ・・・ごめんね、音川君。お力になれず・・・」

音川「いえ、モーニングセットに罪はありません」

エリカ「そりゃそうよね」

音川「問題は・・・」

恩「問題は？」

音川「縁さん、あなたです！あなたがいるから僕は東大に受からないんです！」

縁「え？どうして私？」

恩「ちよつと音川君、それはいくらなんでも支離滅裂じゃない？」

ニーチェ「自分の失敗を人のせいにするなんて、そりゃ駄目よ。バカじゃないの」

エリカ「あんた縁ママにさんざんお世話になってるくせに何言ってるのよ？子供でも容赦しないわよ、わたしはそういう筋違いな話、許せないたちなんだから」

音川「好きなんです！」

みんな「・・・え？」

音川「・・・僕は・・・縁さんが好きなんです・・・だから、だからここで勉強してても、勉強が、全然頭に入らないんです！」

みんな「・・・」

音川「だから・・・僕は決めました。今日から金輪際、縁さんのことは考えず勉強一筋で行きます。縁さん！」

縁「は・・・はい」

音川「今までありがとうございました！縁さんのことは一生忘れません！あなたを好きになったことは僕にとって最高の宝物です。この思いを胸に、一生懸命頑張って、来年こそは必ず！東大に受かってみせます！」

縁「はい・・・がんばって」

音川「それでは、いただきます」

モーニングを食べ始める音川。

エリカ「・・・食べるの？」

音川「はい、もちろんです」

ニーチェ「でも、店には来なくなっちゃうのかな？縁さんがいるから」

音川「いいえ、今まで通り来ます。それとこれとは別ですから」

エリカ「別？・・・別かな？」

ニーチェ「わからん。もはや異次元なメンタルよね」

縁「なんだか私、勝手にふられたような感じになっちゃってない？」

恩「まあ、店には来てくれるようだから、いいんじゃない？」

縁「・・・うん、ま、いいか」

ドアチャイムの音。

女子高生のざらめちゃん来る。

ざらめ「おはようございます!」

縁「おはようございます」

ざらめ「あの・・・今日もいいですか?」

縁「ええ、いいわよ。座って」

ざらめ「・・・ありがとうございます。あ、この間と同じ」

縁「モーニングセットね。スクランブルエッグでいいのよね?」

ざらめ「はい、お願いします」

キッチンに行く縁。

恩「はい、お水。ざらめちゃん」

ざらめ「ありがとうございます・・・恩ちゃんさん」

恩「名前覚えてくれたんだ」

ざらめ「はい」

恩「大丈夫?」

ざらめ「はい。大丈夫です」

恩「うん、ならいいよ。ゆっくりしてって」

ざらめ「はい・・・」

ざらめのモーニングセットを持って、キッチンから出て来る縁。

ニーチェ「縁さん、縁さん」

縁「はい?」

ニーチェ「高校生じゃないの? いいの? 学校あるんじゃないの?」

縁「ええ、そうなんですけど。色々あるみたいで。恩ちゃん、お願い」

恩「OK」

ニーチェ「恩ちゃん今、ざらめちゃんって呼んでなかった?」

恩「ええ。始めてきた時、テーブルにあるざらめ、ぼりぼり全部食べちゃったから」

ニーチェ「全部?」

ざらめにモーニングセットを運ぶ恩。

縁「帰りに恩ちゃんが、“じゃあまたいつでもおいで、ざらめちゃん”って
ニーチェ「それで」

縁「先週の水曜日の朝、突然来てモーニングを食べて行ったんです。制服だったし、一人だったから気になって声掛けたら」

ニーチェ「どうしたの？」

縁「泣き出しちゃって」

ニーチェ「あらあら」

縁「多感な時期ですからね。私もそうだったから」

ニーチェ「何が？」

縁「こう見えて私、よく学校さぼってたんです」

エリカ「なにになに？面白そう」

ニーチェ「縁さんが不良だったって話」

エリカ「えー、そうなの？見えなーい」

縁「そんなんじゃないですよ。ただ、学校はなんだか居心地が悪くて、アルバイトばかりしてました」

エリカ「なんのバイト？」

縁「喫茶店です」

ニーチェ「あー、それでここを？」

縁「まあ、それだけじゃないんですけど、でも・・・やっぱそのせいなのかな」

エリカ「そうでしょ。縁ママのコーヒー好きは筋入りだもん」

縁「やだエリカさん、筋金入りだなんて、オーバーよ。私はただ好きだけで。もっともっと詳しい人はいっぱい」

エリカ「違うのよ。縁ママくらいがちょうどいいの。何でもさ、必要以上に詳しい人とか、そういうオーナーの店ってうざいじゃん！」

ニーチェ「言ってる」

エリカ「ユーカりはさ、縁ママと思ちゃんの人柄もだけど、何ていうか居心地がいいのよね」

ニーチェ「そう！リラックスできて、それでいて自分ちとはちよつと違って。家に一人でいると考えることがどんどん暗い方向へ行っちゃうんだけど、ここに来て考えてると結構ポジティブになれるのよね」

エリカ「人がいるっていうのがいいのかしら？」

ニーチェ「一人じゃない、っていうやつ？」

エリカ「そうね、あー、いろんな人がいて、みんな頑張ってるんだなって実感できる・・・みたいな」

縁「そうかもしれませんね。そうだとしたら、すごくうれしい」

突然近づいてきたざらめ。

ざらめ「そのとおりです！」

縁「・・・ざらめちゃん？」

ざらめ「縁さん・・・会って二回目で、不躰なお願いなのはわかってるんですけど・・・ユーカリでアルバイトさせてくれませんか！？お願いします！」

縁「え？アルバイト？うちで？」

ざらめ「はい。お金はいりません！1日、1時間でもいいです。どうか、どうかお願いします！」

縁「どうしたの？ざらめちゃん」

ざらめ「私・・・クラスのみんなに嫌われてて・・・それで学校行きたくなくて、だけど・・・だけど逃げてばかりじゃ、ずっと嫌われ者のままだから、自分から変わってみよう、変わってみたいって思って・・・縁さん見てたら、縁さんみたいになりたいって、私も縁さんみたいに、みんなに笑顔を振りまける人間になれたらきつと・・・そう思って・・・だから」

縁「ありがとう、ざらめちゃん。でも・・・ごめんね。実はお店、あと3日で閉めるんだ」

ニーチェ「え？」

急に立ち上がる音川。

音川「縁さん！・・・3日で閉めるって・・・閉店するってことですか？」

縁「うん・・・ごめんね、音川君」

エリカ「ちよつと、何よ急に。どうして今まで言わなかったのよ」

縁「ごめんなさい、エリカさん・・・なんだか言いづらくて」

ニーチェ「3日って、明後日でユーカリは終わりってこと？」

縁「・・・はい。ごめんね、ニーチェさん」

ニーチェ「えー？困るー、困るわよ、そんなこと突然言われたって・・・徹夜明けのコーヒードこで飲めばいいのよ？いやよ、スタバとかドトールとかみたいなのチェーンは」

エリカ「なんとかならないの？縁ママ、ねー」

縁「ごめんなさい、みんな。これには色々わけがあつて。実は」

縁「ざらめちゃん。アルバイト、採用するわ」

ざらめ「え？・・・でも、もうすぐ閉店するんじゃない？」

縁「うん。3日間しかないけど、今から働いてみない？」

ざらめ「いいんですか？」

縁「うん。何をしてあげられるかわからないけど、自分のことをそんな風に思ってくれた女の子放っておけないわ」

ざらめ「縁さん！」

縁「閉店の理由はお金です」

エリカ・ニーチェ「お金！？」

縁「はい。今まで頑張ってきたんだけど、資金繰りが上手くいかなくて。ごめんなさい！
だけどあと3日、誠心誠意心を込めて営業させてもらいます。どうか3日間、必ずモーニングセットを食べに来てください。宜しくお願いします。ほら、恩ちゃんも。はい、新人
さんも」

ざらめ「あ、はい！」

恩・ざらめ「宜しくお願いします！」

泣きはじめ駄々をこねるニーチェとエリカをなだめつつ、

ざらめにエプロンをさせて仕事を再開する縁たち。

閉店後のユーカーリ。

片付けをする3人。

縁「ざらめちゃん、もういいわよ」

ざらめ「でも」

恩「あとは私たちがやるから。ありがとう、助かった」

ざらめ「・・・はい。じゃあ」

縁「あ、ちよつと待って。はい、これ。今日のお給金」

ざらめ「え！いりません。私、働かせてもらえるだけで、それだけで」

縁「いいから」

ざらめ「でも・・・」

縁「受け取って。そうじゃないと残りの2日間、こき使いづらくなっちゃうから」

ざらめ「来ていいんですか？2日間」

縁「そういう約束でしょ？それとももう嫌になっちゃった？」

ざらめ「ありがとう！（抱きつく）・・・ありがとう、縁さん・・・」

縁「こちらこそ。ねえ、ざらめちゃん」

ざらめ「はい」

縁「孤独な時間と言うのは、生きてる中で、案外、大切なものよ。今がざらめちゃんにと
って、その時なんじゃないかな。いっぱい悩んで、いい女になりなさい」

ざらめ「・・・はい」

恩「そこまで送る」

ざらめ「・・・はい・・・お疲れ様でした」

ざらめを送って出ていく恩。

テーブルにつき物思いにふける縁。

恩が戻ってくる。

恩「なんかまっすぐ前見て、ずんずん帰って行ったわよ」

縁「そっか。いい子ね」

恩「うん。きつと目立つのよね、他と違う子は」

縁「そうね。自分の価値観をしっかりと持ってるから、簡単に他の人に合わせられない。知らず知らずのうち周りから浮いちゃう。何考えてるのか分からないとか、しらけてるとか。本人は全然そんなつもりがないのに、ね？」

恩「・・・ね？つてなによ」

縁「恩ちゃんとおんなじ。いじめこそなかったけど、クラスのみんな、恩ちゃんには一目置いてたんもん」

恩「別に私は・・・。でも確かに、誰とも話合わないなっていつも思ってた」

縁「ほら」

恩「ははは。でも縁がいたから、わたしは全然平気だったな」

縁「ざらめちゃんにも、誰かいればいいのにな」

恩「大丈夫よ、彼女ならいつかきつと・・・それより、縁」

縁「なに？」

恩「どうしてあんな嘘言ったの？」

縁「お金が無いって話？」

恩「うん・・・ちゃんと話せばいいのに。お店閉める本当の理由」

縁「ねえ、恩ちゃん、真実を伝える事がいつも正しいとは限らないって、思わない？」

恩「どういう意味？」

縁「知らないほうがいい事だっと思う。言いたい気持ちはこっちの勝手に、聞かされた方は嫌かもしれない。私は自分の事で大事な人たちに迷惑かけたり、悩ませて気持ちを暗くさせたりするの嫌なの。楽しい事だけ共有したい。本当は恩ちゃんとだって」

恩「ふざけないでよ。私がいつ迷惑だなんて言った？」

縁「恩ちゃん・・・」

恩「私はみんなだって、一緒に受け止めて考えてくれると思う。そういう人たちだって私と思う。後から知ったら、どうして教えてくれなかったんだって、すごくさびしがると思うよ。そういう人たちだよ、ニーチェさんだってエリカさんだって。違う？あんなこそ、格好つけてるだけでみんなを信じてない。逃げてるだけでちゃんと戦ってない」

縁「・・・」

恩「・・・あんな本当に生きたいと思ってる？頑張るとか口では言っても、心の底では、あきらめてるんじゃない？癌なんか治らない、もう死んじゃうんだとか思ってる？ねえ、どうなのよ？本当に生きようと思ってるの？」

縁「思ってるよ・・・思ってる・・・だけどどうなるかはわからないから」

恩「なにが分からないって言うのよ？絶対頑張るってどうして言わないの？」

縁「言えば絶対治るの？進行が速くて手術できないんだよ？」

恩「それは放射線治療で癌を小さくしてから、手術しようって先生が言って」

縁「わかってる・・・ちゃんとわかってるから、そんな怖い顔しないでよ」

恩「・・・私が縁を守る。ぜったいに死なせたりしないから・・・だから縁も、あきらめたりしないって、約束して・・・お願い」

縁「ありがと、恩ちゃん・・・私、あきらめてないよ。ちゃんと治して、また恩ちゃんと店続けたいから。でも私、やっぱり皆には言わないでいたいの。元気になってまたお店再会したら、その時笑い話として聞いてもらいたいの。いいでしょ？恩ちゃん」

恩「・・・わかった・・・わかったよ」

縁「ありがと、恩ちゃん」

◆2CUP

閉店まであと2日の朝。

いつもの常連たちがモーニングセットを食べている。

いそいそと働くざらめちゃん。

エリカ「新人ちゃん、コーヒーおかわり」

ざらめ「はい！コーヒー追加です」

縁「はい」

ニーチェ「恩ちゃん、お水くれる？・・・恩ちゃん？」

恩「はい？何か言いました？」

ニーチェ「お水。なに、どうかした？」

恩「いえ、別に。ざらめちゃん、お水お願い」

ざらめ「はい」

音川「あの」

立ち上がる音川。

エリカ「どうしたの？二浪君」

音川「音川です！やめてください、そんな呼び方！定着したらどうするんですか？」

ニーチェ「大丈夫よ、明日で閉店なんだから。明日が終わったら、あんたの事なんてきれいさっぱり忘れてあげるから」

音川「え！それはあまりに冷たくないですか？」

ニーチェ「冷たい？泣きたい気持ちをごくとおさえて明るく振舞ってるのが分からないの？だから二浪するのよ」

音川「それは関係ないでしょう！？」

エリカ「それで何よ、立ち上がってまで何が言いたいの？」

音川「おそろく・・・店の雰囲気がおかしいですね！」

ニーチェ「知ってるわよ、馬鹿じゃないの？」

エリカ「それをわざわざ言わないのが大人ってmondesho? やっぱり二浪はだめね」

音川「だからそれは関係ない！」

もめる3人。なだめるざらめ。

止めに入る縁。

縁「ごめんね、みんな。何でもないの。本当に・・・ね？ 恩ちゃん」

恩ちゃん「・・・・・・」

ドアチャイムの音。

ざらめ「いらっしやいませー！」

省吾「やっていますか？」

縁「はい。営業していますよ。どうぞ」

ざらめ「こちらへどうぞ」

省吾「ありがとうございます。奈々子」

奈々子「・・・・・・」

席に着く省吾と奈々子。

ざらめ「いらっしやいませ。何になさいますか？」

省吾「えっと、どうする？ なにか食べる？」

奈々子「いらぬ。コーヒー」

省吾「じゃあ、ホットコーヒーと、俺はモーニングを」

ざらめ「かしこまりました。ワンモーニング、ワンコーヒーです」

縁「ワンモーニング、ワンコーヒー、かしこまりました」

キッチンに行く縁。

エリカ「だいぶ板についてきたじゃない」

ざらめ「ありがとうございます。昨日二人が帰った後、少し混んだんですよ。アタフタしたけど頑張りました」

ニーチェ「明日には卒業だけだね」

ざらめ「んー・・・」

エリカ「だけど今朝の二人どうしたんだろう？昨日なんかあった？」

ざらめ「さあ、私が帰るまでは普通でしたよ」

ニーチェ「つてことは、その後か」

エリカ「まあ、ずっと一緒にいれば喧嘩もするか。親友とはいえ」

ざらめ「親友なんですか？縁さんと恩ちゃんさん」

ニーチェ「そうでしょ、一緒に店やってるくらいだもん。高校の同級生らしいけどね」

ざらめ「へー、じゃあずいぶん長いんですね。いいな、うらやましい」

エリカ「あんたはいいいの？親友」

ざらめ「・・・いません」

エリカ「そうか、嫌われ者だつて言つてたもんね」

ざらめ「ひどい！う・・・うええ（泣）」

ニーチェ「泣ーかした、泣ーかした、エリカさんが泣ーかした♪」

エリカ「わ、うそうそ！ごめんごめん！泣かないで、お願い」

ざらめ「（ケロッとして）泣きません。もう泣き疲れました。それに昨日一日働いて分かりました」

ニーチェ「なにが？」

ざらめ「学校なんてメテクチェ小さな世界なんだつてことが」

エリカ「わお、大人の階段のぼっちゃったか？」

ざらめ「昨日混んだつて言つたでしょ？」

ニーチェ「うん」

ざらめ「電気工事の人たちがランチを食べに来たり、スーツを来たサラリーマンが電話で誰かに謝っていたり、子供連れのママさんたちが悩みを相談し合ったり、みんな頑張つて生きてるんだなつて、すごい思つちやつて。だから、学校生活はいづれ終わるんだし、くだらないことに囚われてないで、自分が思つたようにやつていこうつて決めたんです」

音川「君、すごいなあ」

ニーチェ「あら、聞いてたの？」

エリカ「あんたもざらめちゃん見習つて、東大なんかやめて、マグロ漁船にでも乗つたら？人生観ひっくりかえるわよ？」

音川「検討してみます！」

ニーチェ「やめなさい、やめなさい！あんたは地味に受験勉強してればいいのよ。漁師なんかあんたに務まるわけじゃないじゃない」

省吾の大きな声に、一瞬凍る店内。

省吾「だから、何度も言つただろう！？彼女とは何もなかったんだ！どうして信じてくれ

ないんだ!？」

奈々子「……………」

省吾「……………あ……………大きな声出して、すみません」

奈々子「(泣きはじめる)……………でも、大好きだって……………大好きだって書いてあったじゃない!？」

省吾「だからそれは……………」

ニーチェ「あー、携帯見られたクチだ」

ざらめ「携帯?スマホの事?」

エリカ「他の女とのやりとり見られたってやつね」

ざらめ「浮気してたんですか?……………あの人」

エリカ「知らないけど、そうなのかもしれないわね」

省吾「してません!……………浮気なんて」

エリカ「聞こえちゃった?でもどうしたのよ?」

ニーチェ「興味本位な女ね」

エリカ「んふふふ、夜の女はゴシップ命よ。してないって言ってるけど、彼女は信じられないのよね?」

奈々子「妻です……………結婚してお腹に子供がいるんです!なのに……………なのにこの人っただら! (大泣き)」

ざらめ「ひどい!旦那さん、それは男として最低です!」

省吾「ちよつと待ってくれよ、俺は本当に」

注文の品を運んでくる縁。

縁「お待たせしました。ホットコーヒーとモーニングセットです」

エリカ「縁ママ、聞いた?この男、妊娠中の妻をほっぽらかして浮気したんですって」

省吾「ちよつと、勝手な事言わないで下さいよ!」

縁「落ち着いてください。みんなも面白がって首突っ込まないの」

みんな「……………」

縁「奥さん、大丈夫?もう一度、ちゃんと話を聞いてみたらどうですか?あんまり泣いてると、おなかの赤ちゃん、びっくりしちゃいますよ」

恩「そうね。ほら、とりあえずコーヒー飲んで」

縁「赤ちゃんのこと聞こえちゃったから、勝手にタンポポコーヒーに変えちゃいましたけど、いいですよね?」

奈々子「……………タンポポコーヒー?」

縁「ええ。タンポポの根っこから作るコーヒーで、ノンカフェインだから妊婦さんもOKなの」

奈々子「へえ、そうなんですか・・・(飲む)美味しい・・・優しい味がしますね」

縁「しばらくは本物のコーヒーは我慢かな？」

奈々子「生まれた後もこっちでいいかも」

縁「落ち着いた？」

奈々子「・・・はい。すみませんでした」

エリカ「さすがだわ。縁ママ」

ざらめ「ほんと！憧れちゃう」

縁「やめてよ」

音川「くー・・・やっぱり、僕は、縁さんが・・・いかん、いかん！思い出にしようって縁さんと約束したじゃないか」

縁「私は別に」

音川「縁さん、僕を三浪させるつもりですか？」

ニーチェ「なんなの、あんた」

省吾「奈々子、俺・・・悪かった。だけど本当に彼女とは何もなかったんだ。ただ・・・」

エリカ「ただ？」

省吾「・・・下心が無かったといえは嘘になる。でも」

恩「私、嫌いなよね。その“〇〇が無かったといえは嘘になる”ってやつ」

省吾「え？」

恩「どうしてはつきり、下心があったって言わないの？下心が無かったといえは嘘になるってどういう意味？」

ニーチェ「どうしたのよ？恩ちゃん」

恩「別に。ただ、私の死んだ父親が浮気して母親にばれた時、言ったんですよ。小学2年生の私と5年生の姉に。何もなかったと言ったら嘘になる、って。軽蔑したなー、あの時」

縁「恩ちゃん」

省吾「・・・」

縁「だけど、一理あるかもしれないね、旦那さん」

省吾「はい？」

縁「何もなかったと言うことを信じてもらうためにも、その時の気持ち、全部話した方がいいかもしれないね」

奈々子「・・・省吾。どうして、あんな・・・大好きだなんてライン、他の女の人に送ったの？」

省吾「だからそれは・・・」

エリカ「したかったんでしょ？浮気」

省吾「いや、それは・・・ごめん！正直、浮気したい気持ちはあった。でも、絶対しようと思ってたわけじゃなくて、なんだかい雰囲気になっちゃって・・・だけ」

奈々子「だけど、何？」

省吾「・・・それでも俺は、奈々子が一番大事で・・・このまま浮気しちゃったら、奈々子に一生嘘ついていけなくちゃいけないのかなって思ったら・・・それがすごく嫌で・・・もちろん、子供にも合わせる顔無いなって・・・だからつまり、その・・・本当にごめん！」

奈々子「・・・わかった」

省吾「え?・・・」

奈々子「信じる」

省吾「本当?」

奈々子「省吾の気持ち、わかったから・・・全部、忘れよう」

省吾「奈々子・・・」

奈々子「私もいけなかったよね。自分の気持ちばかりで、省吾にきつく当たったり、小言ばかり言って。だけど、私も省吾の事が・・・二番目に大事だから」

省吾「二番目?」

ざらめ「一番は赤ちゃんですね!」

ニーチェ「いい奥さんじゃないの」

エリカ「男なんてさ、所詮その程度だから、これから言うこと聞かせるためのネタを握ったと思えばいいんじゃない?」

奈々子「はい」

省吾「あの、ありがとうございます。夜通し話し合っただんですけど埒が明かなくて。少し外の空気を吸おうって出てきたら、この店に出会えて、本当に良かった」

縁「こちらこそ、ありがとうございます。さ、旦那さんもモーニングセットをどうぞ」

恩「喉通りますか?」

省吾「まいったな」

笑い合うみんな。

奈々子「これからも、ちよくちよく来ていいですか?マンションにもあまり友達がいないので」

ニーチェ「あ・・・」

ざらめ「それが・・・」

縁「ごめんね。実は明日でこの店、おしまいなの」

奈々子「え?」

ドアチャイムが響き、ベルバラ婦人が入ってくる。

恩「いらっしやいませ」

婦人「エリカママいる?」

エリカ「婦人、ここです」

省吾「残念だね。せつかくいい店なのに」

奈々子「本当に。前から決まっていたんですか？」

音川「昨日、突然発表されたんです」

婦人「何？閉店の件？」

エリカ「ええ、そうです。みんな、聞いて。喫茶ユーカーリの救世主を紹介するわ」

ニーチェ「救世主？」

縁「エリカさん、救世主って？」

エリカ「縁ママ、ごめんね。嫌だったらすっぱり断って来ていいから。だけど、出来ることならユーカーリをつぶしてほしくなくて、婦人に頼んでみたの」

ニーチェ「あー！この人か、噂のベルバラ婦人！」

みんな「ベルバラ婦人！」

エリカ「そう。もちろん通称だけど、ここから10分くらい行った高台にある、お城みたいなお家知らない？」

音川「あ！知ってます！てっきりホテルか何かと思ってました。なるほど、確かにベルサイユ宮殿みたいですよ！あそこに住んでるんですか？」

婦人「そうよ、坊や。今度泊りにいらっしやいな。好きなベッドルームで眠ればいいわ」

音川「生きて帰れますか？」

婦人「(大笑) さあ、どうかしらね」

音川「ひー！」

恩「だけど、エリカさん。何を頼んだって言うの？」

エリカ「お金よ。お金を貸してあげてくれない？って頼んだのよ」

縁「お金！？でもそんな、どうして？」

エリカ「どうしてって、縁ママが言ったんじゃない。資金繰りが行き詰ったから店を閉めることになったって」

縁「え・・・でも・・・」

エリカ「だってさ、昨日だって夕方から混んだっていうし、場所もそんなに悪くないと思うし、まだあきらめるのは早い気がしてさ。それで夫人に話をしてみたら相談に乗ってくれるって」

ニーチェ「あんたと婦人はどういう関係なのよ」

婦人「命の恩人」

音川「命の恩人？」

婦人「ええ。私、2年前にね、最後の家族だった母を亡くしたの。父は母より3年早く亡くなったんだけど、父が築いた財産で生活に不自由は無かったわ。だけど世界でたった一人きりになっちゃったと気付いた時、とてつもなくさびしくなって、私は酒に溺れママの店でよく酔いつぶれて迷惑をかけてたのよ。だけどそのうち、葉っぱに手をだし、ついには葉にまで手を染めて、どんどん駄目になっていった」

省吾「葉っぱ？薬って・・・ドラッグのことですか？」

婦人「そう。ほとんど死にかけてた私は、エリカママと出会って、いろいろ助けてもらったってわけ」

ざらめ「いろいろって？」

婦人「そうね、例えば警察に話をして自首させてくれた」

奈々子「え？すごい話ですね・・・」

婦人「そう？自首したこともあって執行猶予の判決をいただいて、それから薬を抜く治療にも、ずっと付き合ってくれたの」

省吾「どうしてそこまで出来たんですか？」

エリカ「・・・私の父親がね、アルコール中毒で死んじゃったから、見ていられなかったのよ」

音川「だけど、そんなエリカさんが毎日朝まで酔っぱらってるのもなんだか滑稽ですね」

ざらめ「馬鹿！なんてデレカシーのない人なの！」

音川「君、少なくとも僕の方が年上だと思っただけ」

ざらめ「人間、年齢なんて関係ありません。若くても素晴らしい人はいるし、年上でも馬鹿は馬鹿ですから！」

音川「馬鹿馬鹿って、僕の偏差値はねもう少しで70で」

エリカ「いいわよ、ざらめちゃん。自分でも滑稽だって思ってるから」

ざらめ「エリカさん、でも・・・」

エリカ「もしかしたら、酒を憎んでるから酒を飲んでるのかな？酒なんか絶対負けないぞ、みたいなの。だって美味しいなんて思ったこと、今の一度もないもの」

婦人「お金に困ったらいつでも言っただけで、この人、一度だって無心に来たことはないわ。人生の糧を自分で漕がないでどうするの？っていうのがこの人の主義」

ニーチェ「あんた、意外に格好良かったのね」

エリカ「意外には余計よ」

婦人「そんな彼女がっついにお金の相談に来たの。私嬉しかった。だって、私にはお金しかないのよ。だけど、やっぱり自分の事じゃなかった。ママ友の店を助けたって」

縁「ママ友？」

音川「なるほど！たしかにママ友ですね！」

婦人「それで私はどうしたらいいの？銀行をここに呼ぶ？」

恩「ちょっと待ってください。本当は」

縁「ありがとうございます。ベルバラ婦人」

婦人「いいのよ。初めてお会いしたけど、あなたならきつともう一度、お店を立て直せるんじゃないかって？こう見えて人を見る目はあるつもりよ」

縁「とてもありがたいお申し出で、何とお礼を言えればいいか。でも、お金を借りることは出来ません」

婦人「そう言うだろうと思った。だってエリカママのママ友ですもんね。きっと一本筋の通った人だろうって。だけど、まだ少しでも未練があるなら、私に手伝わせてくれないかしら？だって確かに、ここはつぶすにはもつたいない店ですもの」

縁「・・・実は本当は」

また響きわたるパトカーのサイレン。

音川「なんだろう？すごい数ですね」

みんな「・・・」

エリカ「それで、実は何？何を言いかけたの？縁ママ」

縁「あ・・・融資の件ですけど、少し考えさせてください。また明日にでもちちゃんとお返事させていただきます。本当にご心配頂いて、ありがとうございます」

ベルバラ「わかったわ。私はかまわないから、よく考えて結論を出して。そうだ、私もいただけこうかしら。モーニングセット」

縁「はい。ただいま」

キッチンに行こうとする縁。

いきなりドアが開いて、一人の青年が飛び込んでくる。

青年「・・・」

縁「いらっしやいませ」

キッチンに行く縁。

隅の席に隠れるように座る青年。帽子を目深にかぶっている。

青年に水を運ぶ恩。

恩「いらっしやいませ。ご注文はお決まりですか？」

あずま「・・・コーヒーを」

恩「かしこまりました」

スマホで *twitter* を検索していた音川。

音川「わ、強盗事件だそうですよ！」

ざらめ「強盗事件？」

省吾「さっきのパトカーかい？」

音川「はい。Twitterで検索したら出てきました。えーと、虹ヶ丘駅前のコンビニだそうですが・・・スマイルマートって、めちやくちやすぐそこじゃないですか!・・・えー、犯人は逃走中!?やばくないですか?これ!」

奈々子「怖いわ」

婦人の注文を運んでくる縁。

縁「モーニングセットお待たせしました」

婦人「ありがとう」

縁「どうかしたんですか？」

ニーチェ「駅前のスマイルマートで強盗事件だって」

縁「スマイルマート?坂口のお爺ちゃんの店じゃない」

恩「・・・大丈夫かしら・・・ちよつと見て来るわ」

ざらめ「私も」

恩「あ、お客さん、ワンホットで」

縁「はい。気を付けてね」

恩「うん」

あずま「行くな!」

恩「・・・え?」

あずま「行かないでください・・・お願いします・・・」

ゆつくりナイフを出すあずま。

恩「お客さん・・・?」

ざらめ「きゃ!・・・」

音川「もしかして・・・コンビニ強盗の・・・方?」

ニーチェ「方ってなによ」

音川「いや、一応、初対面なので」

エリカ「こんな時まであなたはまったく・・・それで、そうなの?お兄さん」

あずま「・・・全員、こっちに座ってください・・・早く・・・あなた、シャッター閉め来てください・・・頼むから!」

縁「恩ちゃん、おねがい」

シャッターを閉める恩。

みんなを移動させるあずま。

流れる沈黙。

まだ聞こえてくるパトカーのサイレン。

婦人「ボクちゃん？本当に犯人なの？」

恩「婦人、刺激しないでください」

あずま「・・・犯人？・・・犯人・・・」

婦人「だってなんだか草食な感じよ。まるで女の子みたい。強盗なんてするように見える？」
省吾「でも現に今、これも強盗ですよね？」

奈々子「たしかにそうよね」

エリカ「・・・やっちゃったの？強盗」

あずま「強盗？・・・僕はレジの金とっただけで。強盗なんて、そんな・・・」

婦人「馬鹿ね。それを強盗って言うのよ」

あずま「・・・」

恩「事情は分からないけど、もうやめたほうが良くはない？」

奈々子「そうよ。これ以上罪を重ねないほうがいいわ」

音川「僕たち、黙ってますから。ね？みなさん？ここから出て行って警察に自首してください。きつとそんなに重い罪にはならないと思いますよ」

ニーチェ「そうしなさいよ。東大がこう言ってるんだから大丈夫だって」

音川「東大ではありません。東大志望です」

ニーチェ「あ、そうか。じゃあ駄目だわ、ごめんなさいね」

縁「あの」

あずま「・・・」

縁「コーヒー飲みますか？」

あずま「・・・え？」

縁「ご注文、コーヒーでしたよね？今入れますから」

あずま「あの・・・僕は」

縁「何か事情があったんでしょ？人生色々ありますから。まずは落ち着くことです。落ち着くにはコーヒーが一番」

あずま「あ、ちよっと、動かないで・・・あの・・・」

かまわずに用意をする縁。

コーヒーが入って、あずまに運ぶ縁。

縁「のど乾いたでしょ？どうぞ」

ゆっくりコーヒーを口にするあずま。

あずま「・・・おいしい」

少しだけほっとする皆。

シャッターを叩く音。

ざわつく皆。

警官Aの声「すみません、ユーカーさん？警察です。駅前交番の田川ですけど。お留守ですか？」

声を出そうとするニーチェを止める縁。

警官B「おかしいな？定休日じゃないのに」

警官A「近くで強盗事件があったので、念のため安全確認で回ってるんですが」

警官B「旅行にでも行ったんだろう」

警官A「そうだな」

警官B「次行こう」

警官A「ああ」

歩いていく警官たち。

あずま「・・・すみません」

ニーチェ「どうして止めたのよ」

縁「誰かが怪我でもしたら嫌だから」

ニーチェ「(ため息)・・・とりあえず続きやっていい？」

あずま「つづき？なんのつづきですか？」

ニーチェ「仕事よ。漫画の締め切り今日なの」

エリカ「この状況でよく書く気になるわね」

ニーチェ「書く気になるとかならないとかの問題じゃないの。締め切りは命より大事なのよ」

省吾「命より大事？そんな馬鹿な。仕事が命より大事なわけないじゃないですか」

縁「それは違います」

省吾「え？だって仕事って言うのはお金を稼ぐ手段であって、それが無くても生きていけるわけで、つまり」

エリカ「かわいそうな人ね」

省吾「何がですか？僕のどこがかわいそうなんですか？」

奈々子「省吾、落ち着いて」

省吾「だってさ、奈々子」

縁「仕事の考え方は、人それぞれ違うと思いますけど、時には命より大切なものだと思います」

ニーチェ「そのとおり！だって私から漫画とったら、死んでも同然だもん」

恩「どんなに編集者に文句言われても、書き続けてますもんね、ニーチェさん」

ニーチェ「だってさ、もつたいないじゃない」

省吾「もつたいない？」

ニーチェ「そう。私は天才じゃないけど、ほんのちよつとでも授かった才能があるなら、使わないなんてもつたいないじゃない。違う？」

縁「私は才能なんて何ひとつ持ってないけど、この店は私の一番大切なものです。この喫茶ユーカーは、私にとって命より大事な仕事場です」

省吾「だけど、俺みたいに何の才能もないサラリーマンは、金のために働くしかないですよ。家族のために」

奈々子「省吾」

婦人「それこそ、いい旦那になる才能があるんじゃない？」

省吾「それって才能ですか？」

奈々子「最高の才能よ」

省吾「奈々子」

奈々子「少なくとも私にとってはそう。小さくても、地味でも、ささやかでもいいから、普通の幸せでいい。ううん、普通の幸せがいい」

省吾「わかった。俺、頑張るから。奈々子のためにも、子供のためにも」

エリカ「大丈夫よ、必殺の証拠物件があるから」

ニーチェ「携帯ね。わははは」

省吾「蒸し返して笑わないで下さいよ」

ニーチェ「ごめんごめん(笑)」

ざらめ「あなた」

恩「どうしたの？ざらめちゃん」

ざらめ「あなた、松崎あずまじゃない？1年前の春、退学した」

あずま「……」

◆3CUP

新しいコーヒーをみんなに運ぶ縁たち。

婦人「それで、この子はあなたの同級生なわけ？」

ざらめ「はい、たぶん・・・元同級生ですけど」

奈々子「学校をやめちゃったってこと？」

ざらめ「(うなずく) クラスも違うから詳しいことは知らないんですけど・・・先生に暴力をふるって退学になったって」

縁「・・・本当なの？ざらめちゃんと同級生だったって」

あずま「・・・別にどうでもいいじゃないですか、僕のことなんて」

縁「でも」

あずま「夜になったら・・・暗くなったら出ていきますから。それまですみませんが、このまま・・・お願いします」

音川「だけど君、強盗した上に、人質とって監禁ってことになったら、相当罪が重くなりますよ？」

省吾「身元も割れちゃったんだし、もう逃げようがないよ」

奈々子「きつと親御さんも心配して」

あずま「親は関係ありません」

エリカ「・・・まあ、凶悪犯じゃなさそうだし、やっぱり早いうちに自首しちやっただほうがいいわよ？」

ニーチェ「あ！でも」

恩「どうしたの？ニーチェさん」

ニーチェ「このまま閉じ込められてたら、締切守れなかったとしても立派な言い訳になるわね！」

婦人「命より大切な仕事なんじゃなかったの？」

ニーチェ「あ、ははは、そうでした、そうでした、仕事に戻りまーす」

ざらめ「どうしてこんなことするの？学校やめてから何してたの？お金が無いの？だからコンビニ強盗したの？もうやめてよ。出て行って。このお店の人たちに何かしたら、私、絶対許さないから」

縁「ざらめちゃん、落ち着いて」

ざらめ「だって、だって」

縁「大丈夫よ、ざらめちゃん」

あずまに近づく縁。

あわててナイフを構えるあずま。

縁「このナイフ、おもちゃだから」

さつと、ナイフを奪い取る縁。

あずま「あ・・・」

縁「(ため息) 女の子なんでしょ?」

音川「え?」

ニーチェ「やっぱりね」

省吾「でも松崎あずまって」

婦人「まあ、どちらとも言えない名前よね」

ざらめ「私の高校、女子高ですから」

音川・省吾「女の子―!?!」

省吾「でもどうして女の子が強盗なんて」

エリカ「だから、色々あるのよ、人生は」

恩「あなた、もしかして・・・心だけ男の子?」

あずま「関係ないでしょ!?!あなたには」

恩「もうすでに関係なくはないでしょ。あなたから来たのよ、ここに」

あずま「それはただ逃げて来て、隠れる場所が必要だったから」

恩「そうだとっても、偶然だとしても、入ってきたのはあなたよ。選んだのはあなた」

あずま「何を言ってるんですか・・・わかりました、出ていきます」

恩「駄目よ」

音川「えー!?!」

恩「決めた」

ニーチェ「何を決めたの!?!」

恩「あと1日と半分でユーカーリは閉店する。だから決めたの。今日、ここで、この場で全員すべてをさらけ出しましょう」

奈々子「さらけ出すって、いったい何を」

恩「カミングアウトよ!」

みんな「カミングアウト!?!」

恩「そう」

縁「恩ちゃん」

恩「縁は黙ってて。いいですか、みなさん。明日でこの店は終わり。その前に隠してる事を全部言っちゃいましょう!それですっきり終わりにしましょう!」

エリカ「どうしてそうなるの?」

婦人「いいじゃない。やりましょうよ、そのカミングアウトっていうやつを」

エリカ「まあ、面白そうだけど」

音川「何かあるかな、隠してることなんて」

恩「小さなことでもいいです。なんでもいいんです」

ニーチェ「あ、じゃあ、私・・・言っちゃおうかな」

エリカ「イエーイ、言っちゃえー」

婦人「フー!」

恩「ではまずはニーチェさん」

ニーチェ「私、本当は、今回の原稿で・・・連載無くなっちゃいました！」
みんな「・・・・・・・・」

ニーチェ「やだ、シンとしないでよ・・・あははは」

恩「・・・イエーイ！ニーチェさん、大丈夫！ちよびつとだけど才能あるんだから！」

ニーチェ「ちよびつとつて」

音川「フレ、フレ、ニーチェ！フレフレニーチェ、フレフレニーチェ！」

ニーチェ「もう、万年浪人生が（ちよい泣）」

音川「二浪です。万年なんて縁起でもない」

エリカ「笑）それじゃ、二浪君」

音川「音川です！」

エリカ「はいはい、じゃあ音川君。つぎはあんたね。縁さんが好きだった他には何かある？」

ニーチェ「ちゃんと笑わせなさいよ」

音川「ハードルあがるなあ」

ニーチェ「褒めてねえし」

音川「僕は、そうですね・・・実は、女の人とチューをしたことはありません！」

ニーチェ「知ってるー（笑）」

エリカ「あらあら（笑）」

音川「チューってどのようにするんでしょうか？タイミングがわかりません。せーのです
るんですか？二人で目を閉じて、変なとこにたどり着いたりしませんか？どのくらいして
から離れればいいんですか？ねえ、笑ってないで、ニーチェさん！エリカさん！」

エリカ「あー、おかしい」

ニーチェ「合格、合格だからもうやめて！お腹いた」

婦人「こうするのよ」

おもむろにベルバラ婦人にキスされる音川。

婦人「簡単でしょ？考えちゃ駄目。感じ合えば目を閉じていたって、自然に始まり自然に
終るわ。どうだった？」

音川「・・・・・・・・・・は！僕のファーストキスがー！！」

婦人「ほーほほほ」

エリカ「ニーチェ」（爆笑）」

ざらめ「次・・・私行きます」

音川「行け行け！」

ざらめ「私・・・さつきは偉そうなこと言ってたけど・・・自分がいじめられないために、
他の人のいじめに加わりました・・・ごめんなさい（泣）・・・ごめんなさい（大泣）」

奈々子「大丈夫、あなただけじゃない。私もそうだった」

ざらめ「・・・え？」

奈々子「私もいじめにあったことがあって、毎日怖くて、なんとかしたくて、あなたと同じことをしちゃったの。人間って弱いから。私はそのまま卒業して、何事もなかったように大人になっちゃたけど、今でも後悔してる。ときどき夢にみるわ、いじめられる自分もいじめてる自分も。あー、どうしてあの時って。けどあなたは若いんだから、十分間に合うわ。私みたいな夢を見ないでいいように、がんばって。ね」

ざらめ「ありがとう、奈々子さん」

奈々子「あら、もう覚えてくれたの？」

恩「そう。この子、名前すぐに憶えてくれるんです。それって嬉しいですよ」

奈々子「うん、うれしい」

恩「じゃあ、次は私が行きますか？」

ニーチェ「待ってました！恩ちゃん」

恩「私はね・・・縁が好き」

エリカ「ふーん、それが？」

恩「友達としてじゃないの・・・愛してる・・・縁を」

ざらめ「・・・恩ちゃんさん？」

恩「カミングアウトします。私は同性愛者です」

ニーチェ「恩ちゃん・・・」

恩「好きなの、縁が。昔からずっと。私たちが会ったのは高校の時。ざらめちゃんと一緒に女子高だった。中学生の頃には気づいてたわ。自分が他の人とは違ってるってこと。高校に入って、縁に会って、更にはつきりした。男の子じゃなく、女の子を好きになっちゃうんだなって。ごめんね、縁。変なやつで。最初は気付かれないように、友達のふりしてたわ。そうすればいつだって一緒にいられるし、手をつないだって変に思われないから。だけどね、突然、縁に言われたの。恩ちゃん、私の事が好きなの？って。えー、ばれた？って思って、すごくあわてて、あー嫌われちゃうなって落ち込んだんだけど、いいよって。縁は好きでいいよって、言ってくれた。だからずっと縁に甘えて、今日まで来ちゃいました。ごめんね、縁、私がいいたから、普通の恋、出来なかったよね・・・ごめん」

縁「馬鹿みたい、なに謝ってるのよ。私も恩ちゃんが好きよ。同じじゃないかもしれないけど、間違いなく好き。じゃなきゃ一緒にいない。私は昔から、結婚とかもする気なかったし。私は女の人が好きっていうより、男の人が嫌いなんだ・・・私、子供の時、知らない男の人にひどい事されたことがあって・・・」

婦人「よしなさい。その先は言わなくていいのよ。忘れるべきだわ。自分で自分を傷つけるのは今日でしまい。いいこと？良く聞いて。あなたは何ひとつ汚れてなどいないし、恩ちゃんも、自分を卑下するのはおよしなさい。素敵じゃない、好き同志一緒に過ごして、一緒に店をやって、一緒に人生を歩む。これ以上の幸せなんてあるのかしら？だいたい人を好きになるのなんて、男女の間でもわけが分からないものよ。愛する事に理由も理屈もいりはしない。そこにあるのは、奇跡だけよ」

ざらめ「奇跡・・・」

ニーチェ「だからか」

エリカ「なにがだからよ」

ニーチェ「居心地良かったのは、二人の互いを思う優しさが店中に満ちてたからなんだわ」
エリカ「なるほど。たしかに」

恩ちゃん「ニーチェさん・・・エリカさん・・・」

婦人「だからお嬢ちゃんもガリ勉君も、早いところ本気で人を好きにおなりなさい。私は家庭も子供も持つてはいないけど、恋だけはたくさんしたのよ」

音川「それでチューが上手くなったのですね？」

婦人「あら、もう一回する？」

音川「結構です！いや、勉強のためにもう一度、いやいややっぱり愛のないチューはふしだらです！」

婦人「ほーほほほ、おかしな子。いつでもどうぞ」

奈々子「恩ちゃんさん、おめでとう。本当の自分を、さらけ出せたんですね」

省吾「感動しました。二人の絆に」

エリカ「単純な男ね、安いドラマみたいなセリフ言っちゃって」

省吾「いいじゃないですか、本当にそう思ったんだから」

エリカ「はいはい。だけど、恩ちゃん、もっと早く言えばよかったのに」

ニーチェ「そこがまたこの二人の良いところなんじゃないの？」

婦人「ともかく今日が二人にとって、もうひとつの誕生日よ。生まれ変わったつもりで、これからも仲良くね。コングラチュレーション！」

みんな「おめでとう！」

二人を祝福するみんな

あずま「あの・・・」

みんな「・・・」

あずま「・・・僕も話していいですか？」

婦人「忘れてたわね・・・いいんじゃないやなくて。ねえ？」

エリカ「話しなさいよ」

縁「聞かせて」

あずま「・・・僕は・・・体は女だけど・・・心は男です」

恩「うん・・・」

あずま「一年前、高校をやめました・・・理由は・・・どうしてもスカートが履きたくなくて・・・ズボンをはいて学校に行ったら、先生に怒られて・・・それで口論になって、先生を殴ってしまいました・・・それが原因で退学したんです」

ニーチェ「ひどい学校」

あずま「・・・僕は、スカートをはきたくない理由を学校に説明するために、医者診断書まで持っていきました。だけど先生は、性同一性障害と書かれた診断書を破り捨ててこう言ったんです。変態、さつさとやめろ、風紀が悪くなるって・・・」

エリカ「(ため息) まったく、時代遅れも甚だしいわね」

あずま「学校を勝手にやめてしまって、父親にも僕がそうだってこともばれて・・・毎日なじられて、家にも居づらくなって・・・家出しました。働くために年をごまかして、名前も変えて、でもだんだん仕事も無くなって・・・最後は体まで売って・・・あのコンビニ、良く行ってたんです、学校の帰りに・・・お腹がすいちゃって、悪いとは思ってたけど、パンかおにぎりを万引きしようと思って・・・でも、ふと見たら、レジが空っぽで、お金が見えてて・・・気が付いたら、手が伸びて、お金取ってて・・・それしたら、店のお爺ちゃんが怒ってつかみかかってきて、逃げようとしたら、お爺ちゃん転んじゃって・・・どうしよう・・・どうしよう・・・そう思いながら走って・・・すごく怖くて、それで・・・それで・・・」

ざらめ「・・・やり直そうよ」

あずま「・・・」

ざらめ「さつき奈々子さんが言ってたじゃない。私たちは若いんだからやり直せるって。ね？まだ間に合うよ。やり直そう」

あずま「・・・うん。みなさん・・・すみませんでした」

自分のスマホをあずまに渡すざらめ。

110番に電話をするあずま。

あずま「もしもし、警察ですか？・・・あの、僕、さつき虹ヶ丘駅前のコンビニでお金を盗んでしまいました。はい、自首したいんです。はい、今いる場所ですか・・・、あの、ちゃんと罪を償ったら、またコーヒー飲みに来てもいいですか？」

縁「もちろんよ。待ってるわ」

◆4CUP

閉店の日。

みんなでモーニングセット食べている。

エリカ「しかし昨日は驚いたわね。何も閉店間際にこんな事にならなくなったって、ねえ？」

縁「でも良かった。誰も怪我しないで、あの子も自首出来たし。スマイルマートのお爺ちゃん、あの子が店の常連だったって聞いて情状酌量を願ってくれたんですって。自分の怪我は自分が勝手に転んだんだって、嘘までついて」

恩「お爺ちゃんらしいね」

縁「最初は驚いたし怖かったけど・・・やっぱりこの店は、すごいな。ね？恩ちゃん」

恩「うん、そうね」

縁「これでちゃんとお店休みに出来ます」

エリカ「休み？閉店しないってこと？」

ニーチェ「再開の可能性ありってこと？」

縁「はい。あずま君が戻って来た時、省吾さんと奈々子さんの子供が生まれた時、それからいつもの皆さんがホッとできる場所を無くしちゃ、やっぱ駄目だなって」

音川「やった！」

省吾「よかったな、奈々子」

奈々子「うん！ありがとう、縁さん」

音川「だけど、僕はそのせいでまた浪人することにはならないかな？」

ざらめ「自分次第！でもあなたはきつともう、手遅れですね。縁さん、素敵すぎるもの」

音川「そうだよね！？どーしよー！？」

皆、笑う。

縁「ベルバラ婦人」

婦人「なあに？」

縁「お金、お借りします。店を再開する時のために」

婦人「わかったわ。好きなだけ言って」

縁「ありがとうございます。それからみなさん」

省吾「どうしたんですか？」

縁「カミングアウトします」

奈々子「昨日、したじゃないですか」

縁「実はもうひとつ、大事な事言えてなくて」

奈々子「大事な事？」

縁「私、明日から入院します」

ニーチェ「入院？」

エリカ「縁ママ、どこか悪いの？」

婦人「突然ね」

縁「癌なんです。子宮がん」

ざらめ「え！？」

ニーチェ「嘘でしょ！？あんた」

エリカ「なんで早く言わないのよ！？」

縁「ごめんなさい、なかなか本当のことが言えなくて」

エリカ「じゃあ、もしかして閉店の理由っていうのは」

縁「はい。入院して病気と戦うためにお店をお休みします」

奈々子「大丈夫なんですよ？まだ初期なんですよ？」

縁「私は大丈夫です。必ず、この店に戻ってきて、ユーカリを再開します。約束します」
ニーチェ「絶対だよ。それまでは、嫌だけど、チェーン店で辛抱しとくから」

縁「はい。ニーチェさん」

エリカ「私のママ友は、縁ママだからさ。必ず、生きて帰ってきて」
縁「ありがとう、エリカさん。待っていてください」

恩「私は縁のそばで、縁を支えます。しばらく御迷惑おかけしますが、よろしくお願いします」

婦人「大丈夫。愛があればきっと乗り越えられるわ」

恩「はい。頑張ります。ベルバラ婦人」

ざらめ「うぐっ・・・ぐずっ・・・ひくっ」

奈々子「大丈夫？ざらめちゃん」

ざらめ「だぎばせん（泣きません）、わだじ、だぎばせん（わたし、泣きません）」

縁「それじゃ、またいつか会う日まで・・・長い間ご愛顧、ありがとうございました」

音川「フレー、フレー、ユーカリ、フレフレユーカリ、フレフレユーカリ」

みんな「フレフレユーカリ、フレフレユーカリ・・・」

深くお辞儀をする縁と恩。

1年後。

店を掃除する恩。

キッチンからざらめの叫び声と食器の落ちる音。

ざらめ「あっちー!!」

恩「どうしたの？」

キッチンから出て来るざらめ。

ざらめ「大丈夫です、大丈夫です、ちょっとヤカンさわっちゃって」

恩「気をつけなさい」

ざらめ「はい」

チャイムの音がして、買い物から帰ってくるあずま。

あずま「ただいま」

恩「ありがと、あずま。あつた？牛乳」

あずま「はい。あ、これ、お爺ちゃんがくれました。お店につて」

ざらめ「桜かあ、いいですね」

恩「今年は良く咲いてるね、駅前の桜」

ざらめ「そうですね」

恩「それじゃ、開けようか」

あずま「了解です」

恩「ざらめ、OK？」

ざらめ「完璧です！」

恩「それでは、喫茶ユーカーリ、開店しまーす」

チャイムが鳴り、次々に入ってくる常連たち。

次々に運ばれてくるモーニングセット。

恩ナレーション「縁。見てる？縁。聞こえる？今日もユーカーリの朝が始まったよ。みんな、あなたに会いたがってる。桜が咲いたよ。うん、ちゃんとやってる。大丈夫だつて。ざらめもあずまもすごく頑張ってくれてるから。省吾さんと奈々子さんの赤ちゃん、すごくかわいいよ。なんとなく、縁に似てる。あはは、おかしいよね・・・会いたいな、縁。声が聞きたいよ、縁・・・でもね、時々感じるんだ。あなたがそばにいるのを。さびしいけど、ひとりじゃない。そうでしょ？ねえ、縁」

完